

国際交流基金助成事業報告書

薬学部 6 年次生

酒井悠夏

1. はじめに

私は、2025 年 9 月 20 日から 9 月 24 日まで、シンガポールで開催された、23rd International Congress of Therapeutic Drug Monitoring & Clinical Toxicology (IATDMCT2025) に参加し、自身の研究成果を発表したので、ここに報告致します。

2. IATDMCT について

IATDMCT は、治療薬モニタリング (TDM) と臨床毒性学 (Clinical Toxicology) の発展と臨床応用を目的とした国際学会です。医師、薬剤師、臨床検査技師、研究者など様々な専門職のメンバーで構成されており、国際的な治療薬モニタリングの発展に寄与しています。

今回の学会は、シンガポールの Grand Copthorne Waterfront Hotel にて開催されました。今回私は、walking poster tour presentation を行いました。その他にも Hitachi high-tech workshop、congress dinner、young scientist dinner 等に参加することで海外の方との交流を深めました。



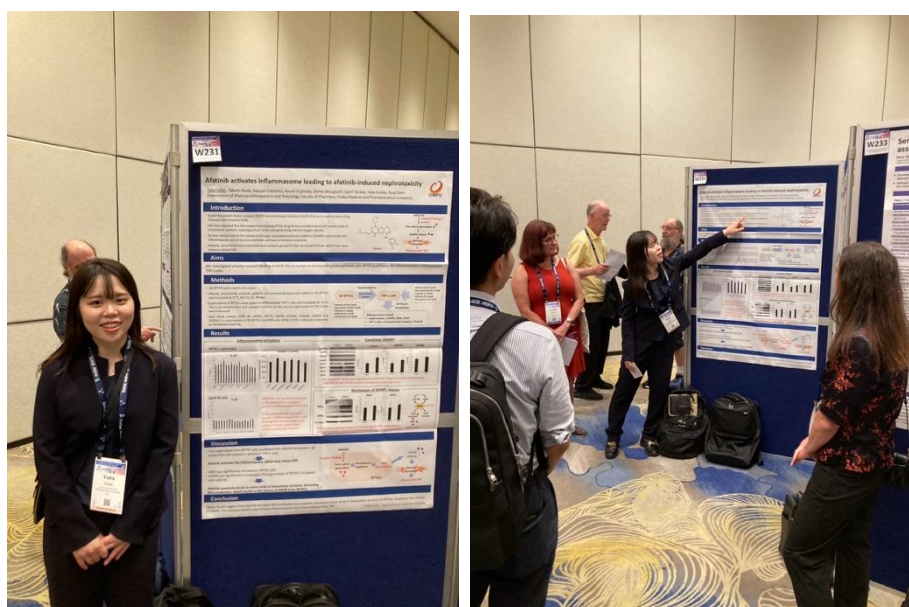
Grand Copthorne Waterfront Hotel



学会の様子

3. ポスター発表について

私は、**Afatinib activates inflammasome leading to afatinib-induced nephrotoxicity** という演題でポスター発表を行いました。この演題は、チロシンキナーゼ阻害薬のアファチニブによって引き起こされる腎機能障害発症機序についての研究をテーマにしたものになります。今回3分間の発表と2分間の質疑応答が設けられていました。3分間という時間制限がある中、英語で伝えることの難しさに最初は苦戦しました。その為、事前にプレゼンテーションの練習を繰り返し行い、アクセントや表現方法についても綿密に準備をしました。本番では練習の成果もあり、丁度3分間で内容をしっかり発表することが出来ました。本番では、英語の発音を意識しすぎると早口になってしまうため、言いたいことが伝わらない可能性があったため、ゆっくり大きな声で聴衆に内容をしっかり伝えることを意識しました。しかし、質疑応答では相手の英語の質問内容を理解することが難しく、自身の英語力の不十分さを痛感しました。この経験を通じて、今後は自身の英語力をさらに向上させ、スムーズに会話ができるようになりたいと思いました。今後、薬剤師になった時に学会発表をする機会があると思いますので、このシンガポールでの経験を生かして積極的に取り組んでいきたいです。



ポスター発表の様子

4. 海外の方との交流

学会主催の Hitachi workshop、congress dinner、young scientist dinner 等に参加することで海外の方々と交流しました。

学会初日は、日立のワークショップに参加しました。そこでイギリスの方と交流する機会がありました。このワークショップで、初めて海外の方としっかりお話をしました。様々な質問を通じて、お互いに交流を深めることが出来てとても楽しかったで

す。英語でコミュニケーションをすることで英語の練習にもなり、ポスター発表の不安を軽減してくれた様に感じます。

学会の Young Science Committee が主催する **young scientist dinner** では、40 歳以下の若手研究者たちとお酒を交えながら交流を深めました。英語が飛び交う中で分からないことも多かったですが、簡単な英語やジェスチャーなどで乗り切ることが出来ました。プログラムの最後にはカラオケも含まれていました。実際に私も友達と一緒に歌わせて頂き、皆さんも場を盛り上げて下さり、とても楽しかったです。さらに、海外の様々な音楽にも触れることが出来て、とてもいい機会になりました。

英語が出来なくてもニュアンスは伝わったりするので、コミュニケーションをしようとする意思の大切さを海外の方との交流を通じて学びました。



Hitachi workshop での交流

5. 終わりに

今回、初めての学会参加が海外ということで自分の中でも大きな挑戦でした。様々な不安がありましたが、その不安をかき消して下さるほど海外の方々が優しく接して下さいました。その為、海外の方々とのコミュニケーションを取ることがとても楽しかったです。同時に、もっとスムーズに会話したいという思いも強くなりましたので、今後自分の英語力を磨いていきたいと思いました。

最後に、今回の国際交流事業を助成して下さいました大阪医科薬科大学国際交流基金に厚く御礼申し上げます。その他、様々な面でサポートして下さいました方々に深く御礼申し上げます。